

知識社会学的メディアとしての社会学教科書

——ディシプリン再生と社会学教育②——

関西大学 川本彩花

1 目的

本報告では、社会学教育においてE. デュルケムをはじめとする理論・学説が教えられる際、その理論・学説のもつ地域性や時代性、およびその理論・学説を主張した人の個人史的背景（パーソナル・ヒストリー）などはいかに扱われているのかについて、日本の社会学教科書を対象に検討する。一般的に、社会学を含む科学（理論）は、2つの側面をもっているといわれる。すなわち、特定の科学者（社会学者）や時代・社会を超えて一般化・普遍化を志向する性向をもつ側面と、科学（理論）も特定の個人や時代・社会において創られるという意味において、特定の個性や社会のあり方に規定されるという側面である（新ほか 1979）。科学（理論）のもつこの2つの側面のうち、後者にも目を向け、社会学の理論・学説をその内容のみならず、社会史的・個人史的背景と結びつけて学ぶ・教えることは、一種の知識社会的な作業であるといえるだろう。それでは、日本において、19世紀ヨーロッパで誕生した学問である社会学の理論・学説が教えられる際、こうした「知識社会的実践」はいかに行われ、社会学の理論・学説のもつ地域性や時代性、個人史的背景（パーソナル・ヒストリー）などはいかに扱われているのだろうか。本報告では、この問いについて、社会学教科書の分析を通して検討する。

2 方法

分析方法としては、日本の社会学教科書のなかでも、「社会学理論・学説の紹介」（稲月・木村 2005）を中心としたテキストを対象とする。また、理論・学説そのものの解説に加えて、その理論・学説の背景にも目配りしているものを対象とし、複数の教科書を取り上げ比較検討を行う。具体的には、『クロニクル社会学』（那須壽，1997，有斐閣）、『はじめて学ぶ社会学——思想家たちとの対話』（土井文博・萩原修子・嵯峨一郎編，2007，ミネルヴァ書房）、『社会学ベーシックス』（井上俊・伊藤公雄編，2008-11，世界思想社）などを取り上げる。

3 結果・結論

分析の結果、社会学の理論・学説のもつ地域性や時代性、その理論・学説を主張した人の個人史的背景（パーソナル・ヒストリー）などの扱われ方（語られ方）として、次のような類型がみられた。すなわち、理論・学説が作り出されたとき／受容されたときの状況・背景に言及するもの、および地域性・時代性・個人史的背景などがあることを肯定（強調）／保留／否定するものである。本報告では、これらの類型を手がかりに、「知識社会的実践」を行うメディアとしての社会学教科書の具体的諸相について検討を進める。

文献

新睦人・大村英昭・宝月誠・中野正大・中野秀一郎，1979，『社会学のあゆみ』有斐閣。
稲月正・木村好美，2005，「社会学テキストの類型化とレビュー——近年の社会学テキストの特徴と課題」『社会学評論』56(3)：685-709。

【付記】本研究は、2015～2018年度科学研究費補助金「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケム社会学を事例として」（基盤研究（B）、課題番号：15H03409、研究代表：中島道男（奈良女子大学））による成果の一部である。